



写真-1 市川右岸堤防から大礼橋を撮影（令和5年8月）

■ 以前から橋名が気になっていた大礼橋

写真-1 は、市川の右岸堤防から主要地方道第81号小野香寺線・大礼橋（たいらいばし）を撮ったものです。橋梁台帳によると、この橋は平成元（1989）年度に完成した6径間連続非合成の鋼桁橋で、橋長は210m、幅員は9.5m（車道=7.0m、歩道=2.5m）です。

大正3（1914）年、この橋の上流約100mの位置に初代大礼橋（木橋）が架けられ、昭和10（1935）年に現・大礼橋の直下に二代目大礼橋（コンクリート橋）が架けられています。そして、写真-1の橋が三代目になります。

では、初代大礼橋が架けられるまでの市川越えはどうしていたのでしょうか。

■ 江戸時代中期に始まった岩部の渡し

江戸時代、市川には戦略上の理由から橋が架けられず、川を越えるのは徒（かち）渡りか渡し舟でした。その渡し舟も、江戸時代中期までではなく、人々は浅瀬を見つけて徒歩で市川を渡っていたそうです。なので、雨が降って水嵩が増えると危なくて渡れなくなります。

岩部は、その昔姫路から生野方面へ通じる但馬街道筋にあって南北方向の交通は問題なかったのですが、東西方向は市川が大きな障害となっていました。享保年間（1716～36）、このあたりで渡し舟が就航していたのは福崎新村（現・福崎町福崎新）と仁豊野村（現・姫路市仁豊野）だけだったので、中間に位置する岩部の人たちは大変不便を感じていました。

岩部区長所に保存されている明和5（1768）年の「岩部村横渉（わた）シ由来」（『香寺町史（地域編）』）によると、「上下二里の間に横渡し（渡し舟）がなくて困っている。水嵩の高い時などお上の御用・通達や私用の急ぎで何気なく渡りかけ、溺れ死ぬものが毎年出ている。そこで、両岸の岩部村をはじめ神東（じんとう）・神西（じんさい）のハヶ村と犬飼組・八反田組の大庄屋が世話して、享保年中に藩主・松平大和守^{※1}へ横渡しを願い出た。藩は、死者が出たり通達が滞ることを

認め、岩部村の長（おさ）百姓・久左衛門を呼び出し、横渡しを許可するとともに、造船費用は自己負担でするよう指示をした。もし、久左衛門が都合によって横渡しを下請けの渡し守にさせるときは、久左衛門が願主のため建造費用の利息及び金子二百疋を毎年暮に下請け渡し守から受け取るよう規定に定められた」とあります。



写真-2 は、大礼橋から上流方向を撮影したのですが、左岸側の家が見えるあたりの川幅が少し狭くなっている所が岩部の渡し場跡です。



写真-2 大礼橋から市川上流方向を撮影



写真-3 加西市長の石切場

明治 32 (1899) 年 6 月の出水で船津村側 (左岸側) の船着場が水勢の変化により使用不能になったため、三又から下垣内に移転しています。渡船は、ほぼ 10 年毎の新舟建造費用等が経営を圧迫し、大正 3 (1914) 年、初代の大礼橋が架けられると、経営上の行き詰まりから請負としての渡船は廃業となったようです。



写真-4 姫路市香寺町岩部の「岩部市川の渡し跡」碑



写真-5 姫路市船津町三又の「市川の渡し場跡」碑

岩部市川の渡し跡

寛保元年に岩部の助左衛門なる者が上二里下二里の近郷ハヶ村の庄屋衆の御構い無しの書状を頂き、姫路藩船奉行の管理を受けて、長さ五間の渡し船を造って公然の渡しを始めた。

加西市長 (おさ) の石材が当町へ文化文政の頃に多量に渡って来て、墓石や灯籠になって残っている。

大正初 (実は 3) 年に出来た大礼橋の新設と共に廃止される。

平成 24 年 1 月吉日建設

香寺町岩部自治会

市川の渡し場跡

三又集落南端の市川左岸 (ここより約 150m 南) が、対岸の「香寺町岩部」との渡し場 (通称いわべの渡し) 跡である。江戸時代には山田から上野・三又への道を穴栗道、仁色・中野から三又への道を姫路道と呼んだ。古くから市川の上下と東西を結ぶ要地で「船津」の地名の発祥地とも考えられる。「道しるべ」は姫路道と渡し場への分かれ道にあったもので「左かや 志そう 右ひめじ道」と読める。

平成 12 年 (2000 年) 1 月吉日

船津町連合自治会

※1 藩主・松平大和守：「岩部村横渉シ由来」によると、「享保年中に藩主・松平大和守へ横渡しを願い出た」とあるが、享保年間は 1716 年から 1736 年で、その間の姫路藩主は榊原正邦 (1704 年~1726 年) と榊原正祐 (1726 年~1732 年)、榊原政孝 (1732 年~1741 年) で、いずれも榊原家であり大和守を称していない。一方、松平大和守とするなら、結城松平家の松平明矩 (あきのり) が大和守を名乗って寛保元 (1741) 年から寛延元 (1748) 年に死去するまで姫路藩主を務めている。いずれが正しいのか判断に苦しむところだが、まあ、どちらでもいっか。

■ 大正 3 年に架けられた初代大礼橋は木橋

旧香寺町（現・姫路市）域で最初に市川に架けられた橋は、播但線の香呂停車場（現・香呂駅）から法華山（現・加西市）へ向かう道路が市川を渡る手段として大正 3（1914）年 3 月 29 日に竣工した初代大礼橋です。大正天皇即位御大礼式典の年だったことが橋名の由来です。

『御大典奉祝記念 郷の光』には、香呂村の大正 4（1915）年 11 月奉祝記念事業として、大礼橋のことを「市川幹流、郡の中央を縦貫せる為彼此交通不便なりしを、向岸船津村と協定し工費金九千四百参拾壹円七拾七銭を投じ架橋をなし交通の便を開く」と記し、船津村の項では「一大架橋をなし川の東西の交通を便にす」と記されています。



図-2 大正末期の大礼橋周辺の地図

なお、大正天皇即位大典は、当初大正 3（1914）年 11 月に予定されていましたが、昭憲皇太后（明治天皇の皇后）大喪（たいそう）のため 1 年延期されています。

初代大礼橋は、橋長 127 間（≒231m）、幅員 2 間（≒3.6m）の木橋で、広瀬の正善寺前を通る村道広瀬村中線の東端に架けられたものです。この村道は大礼橋の開通とともに整備され、村道から郡道へ、大正 12（1923）年 4 月の郡制廃止により県道に移管され、神崎郡の東西および旧加西郡とを結ぶ主要道路として、人や自転車、馬力（荷馬車）や荷車が自由に往来できるようになって人や物資の交流が盛んになりました。昭和初期の一時期には、香呂駅から西山田まで広瀬正善寺前を通過して大礼橋を渡るバスが運行されていたとか。

■ 昭和 10（1935）年の出水時に橋上の 10 人が橋とともに流される

初代大礼橋は、昭和 10（1935）年 7 月 3 日、洪水により流失します。「大阪朝日新聞」（昭和 10 年 7 月 4 日付）は、「三日早朝の豪雨で市川は八尺（≒2.4m）余り増水し、・・・午後四時ごろ大礼橋が俄かの増水のため、東岸長さ四十間（≒73m）は大音響とともに流失し・・・十名が濁流にのみ込まれた」と報じています。（「東岸」は「西岸」の誤り）

翌日の同紙は、「三日午後四時、神崎郡香呂村船津村間市川に架設の大礼橋で増水見物の十名が橋とともに流され、午後六時までに消防組、青年団の手により七名は救助されたが、三名は濁流に呑まれたまま行方不明となったので、香呂、船津、豊富の各青年団、消防組員総動員、婦人会の炊出により市川下流一帯を捜査中」と続報しています。

別の資料では、流されたのは橋の上で遊んでいた子供となっていますが、いずれにしろ増水できしむ木橋の上で自らの身の危険に気付かなかったのでしょうか。

というより、そもそも木橋の上で増水見物（もしくは遊ぶ）なんてもってのほかです。

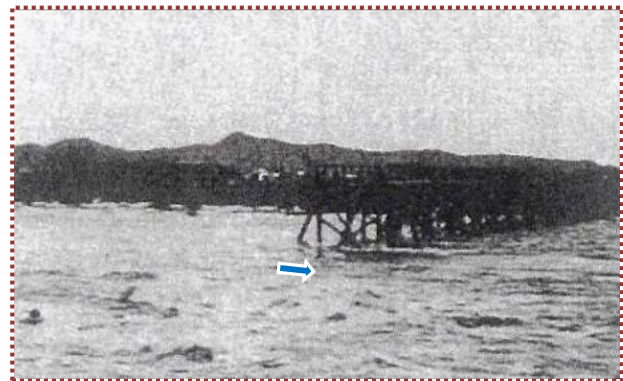


写真-6 初代大礼橋の流失（大阪朝日新聞 昭和 10 年 7 月 4 日）
（『香寺町史（地域編）』から引用・加工）

■ 二代目大礼橋はコンクリート橋

二代目大礼橋は洪水により流失したことで架け替えることとなりますが、実はそれ以前から架け替えの話があったそうです。当時の日本は経済の発展や軍備拡張に伴って次第に人や車の通行量が多くなり、車両の大型化による大量の物資輸送が必要になってきていましたが、木橋では洪水の度に流失を繰り返し、人や馬、車などの往来に支障をきたします。

そこで、県では昭和 7（1932）年度に橋梁架設費総額 336 万円の継続事業を設定し、長さ 20m 以上の国府県道橋梁 107 橋のコンクリート橋への架け替えを進めることにします。

大正 12（1923）年に県道認定された香呂小野線（香呂停車場法華山線の改称）の大礼橋も、香呂村において昭和 9（1934）年度に架け替えるための予算を計上し、昭和 12（1937）年 8 月に完成しています。橋長 210m、幅員 5m、14 径間の鉄筋コンクリート桁橋です。



写真-7 二代目大礼橋（『香寺町史・地域編』から引用）
（上流側に三代目大礼橋の橋脚が見える）



写真-8 大礼橋右岸に保存されている二代目大礼橋の親柱
（もう1基はどこに行ったのかな！）

■ 20 世紀末に架けられた三代目・大礼橋

二代目大礼橋の幅員は5mであったため大型車の離合ができず、いずれかの車が橋の手前で待つことになります。また、当時は船津や山田方面の人が香呂駅まで自転車で行き、そこから列車で通勤・通学していたため、自転車の通行量も多く、交通事故が度々起きて大変危険でした。

このような状況から地元香寺町では県および各方面に陳情した結果、昭和 62（1987）年に姫路土木事務所福崎出張所で二代目大礼橋架け替えの検討が行われることになります。

検討の結果、三代目大礼橋は二代目大礼橋の直上流に並行して架けられることになりました。下部工は、橋台・橋脚共に砂礫地盤に直接基礎とし、逆 T 式橋脚 5 基、RC 扶壁式橋台 2 基、上部工は冒頭に記載のとおりで、事業費は 650 百万円です。

開通式は、平成 2（1990）年 3 月 8 日に行われました。当日は真冬並みの寒波が襲来し、播磨地方も山間部を中心に 3 月の雪を記録した日だったとか。

■ 市川の氾濫原だった岩部に残る大蛇の伝説

岩部の渡し跡から北東に 150m 行った所の姫路市香寺町岩部に大蔵神社（写真-9）があります。左下は、この神社の境内に建てられた説明板の記事です。

昔、市川が氾濫しそうになった時、一匹の大蛇が身を挺して濁流を止め村を守ったことから、里人はお礼に大樽に入れた酒を大蛇に捧げました。以来豊作がつづき、里人は毎年酒樽を担いで氏神様に詣でたといわれています。

毎年、秋祭りに二人で神酒の大樽を担いで氏神に奉納する「岩部の樽かき」は、姫路市無形民俗文化財に指定されています。

岩部の樽かき（香寺町岩部）
この地は昔、市川がたびたび氾濫し、村人は洪水に悩まされてきました。ある年の大洪水に一匹の大蛇が現れ、自分のからだを堤防代りにして濁流を止めました。村人はこの大蛇を神の使者として神酒を供え感謝しました。それ以来、毎年秋祭りには二人で神酒の大樽をかついで氏神に奉納する樽かきを行うようになりました。岩部は『播磨風土記』に記された「的部（つくはべ）の里」の名前を受け継ぐ由緒ある地名です。
昭和六十一年三月



写真-9 「岩部の樽かき」が行われる大蔵神社

■ モノローグ

筆者は、木造の初代大礼橋上にいた 10 名が橋とともに流された記事を『香寺町史』で読んで、平成 11（1999）年 8 月 14 日に神奈川県足柄上郡山北町の玄倉川（くろくらがわ）で発生した水難事故を思い出しました。

熱帯低気圧による大雨で増水した玄倉川において、中州でキャンプをしていた 18 人が流され、そのうち 1 歳から 9 歳の子供 4 名を含む 13 名が亡くなるという痛ましい事故ですが、被害者が非難される異例の事態になりました。

相模湾に注ぐ二級河川・酒匂川（さかがわ）の左支川・河内川上流に昭和 53（1978）年に完成したロックフィル型式の三保ダム（堤高 95m、有効貯水容量 54,500 千 m³）がありますが、この三保ダム貯水池（丹沢湖）に流入する河川のひとつが玄倉川です。

事故の前日、上流にある玄倉ダムの管理職員による 1 回目の退避勧告で大部分の行楽客は退避しましたが、18 人はその後のダム管理職員や警察官による再三再四の退避勧告を無視した結果、大惨事を招くことになり、加えて救助活動やその後の捜索活動に大勢の人の手を煩わすことになりました。下流の三保ダムでも、捜索活動に協力するため大量放水を実施したとか。

最近、富士山での“弾丸登山”が話題になっていますが、自然を甘く見ると、自らの身に手痛いしっぺ返しがかかるだけでなく、大勢の人たちに迷惑をかけることになります。

ダイサギ（大鷺）

サギ科アオサギ属に分類される体長は 90cm ほどの鳥。日本ではアオサギと並ぶ最大級のサギ。全身の羽毛が白色で、雌雄同色。脚と首が非常に長く、くちばしも長い。チュウサギと似るが、チュウサギは体長が小さく、ダイサギほどクチバシは長くない。また、眼の下にある口角の切れ込みがダイサギは眼の後ろまで食い込んでいて容易に判別できる。水田や川、湖沼などで、魚、両生類、爬虫類、昆虫、更には哺乳類や鳥類までも捕食する。首を S 字型に縮めて立っている姿がよく観察される。岩部の渡し場あと付近で撮影。



写真-10 岩部の渡し場跡で小魚を狙うダイサギ

【参考資料】

- 1 『香寺町史～村の記憶（地域編）』 香寺町教育委員会町史編集室 平成 17 年 3 月
- 2 『香寺町史～村の歴史（通史編）』 香寺町史編集委員会 平成 23 年 8 月
- 3 『勝手に播磨紀行～岩部の樽かきと岩部の渡し』 令和 2 年 6 月
<https://youtu.be/76Sdk9QDoLs>
- 4 『姫路藩、玄倉川水難事故、酒匂川、三保ダム、ダイサギ』 フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

※発行：令和 5（2023）年 12 月 『ひょうご水百景』No.186

改訂：令和 8（2026）年 7 月 『ひょうご水百景』No.186